2022 年度「国際哲学特講」アルザス研修報告

法政大学文学部哲学科　君嶋泰明（引率）

目次

1　概要
2　研修の内容
3　合同ゼミの内容
4　参加学生の言葉から
5　写真でたどるアルザス研修

1　概要

「国際哲学特講」は、法政大学文学部哲学科の主催する選択必修科目「哲学特講」の一つです（秋学期 2 単位）。この科目では、フランスのアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力を得て、学期の最後、2 月初めに、フランスのストラスブール大学（担当：黒田昭信先生）とドイツのハイデルベルク大学（担当：ハンス・マーティン・クレーマ先生）との合同ゼミを含む海外研修を行っています。2020、21 年度はコロナ禍により現地に行くことができなかったためオンライン研修を実施しましたが、本年度は 2 年ぶりに現地研修を再開しました。

2 月初めに行われる合同ゼミは、三大学それぞれにおける正規の授業の一環です。前年の 8 月までに合同ゼミで扱うテキストやテーマを選定し、9 月から 1 月までの間、それぞれの大学でそのテキストやテーマに沿った授業を展開します。その間、参加学生はテキストやテーマについての研究を行い、その成果を2月の合同ゼミで発表します。とくにストラスブール大学と法政大学の学生は、本年度は三つの仏日混合グループを作り、そのグループでの共同発表を目指して、授業外でも連絡を取り合いながら準備を行ってきました。そして 12 月を除いて毎月一回オンラインで合同授業を実施し、進捗報告や発表内容の検討を行いました。

そのうえで 2 月の研修では、まずはストラスブール大学で（2 月 6 日、7 日）、次いでハイデルベルク大学で（2 月 9 日）、それぞれ合同ゼミを行いました。またそればかりでなく、CEEJA 学術部門副所長のレギーヌ･マティアス先生にご講演をいただいたほか、アルザス、ハイデルベルクの名所旧跡を見学しました。

2　研修の内容

法政大学の参加学生は 19 名（4 年生 2 名、3 年生 8 名、2 年生 9 名）です。2 月 4 日（土）に出発し、11 日（土）に帰国しました。現地では全行程にわたり徳江純子氏（CEEJA 研究･教育部門責任者）がアレンジ･同行してくださいました。またフランスでの日程ではストラスブール大学日本学科の修士課程の学生二名（シャーリー・アルメイダ氏、アマンディーヌ・ケルン氏）が同行し、サポートしてくださいました。

以下、研修の内容を時系列順に、簡潔に記します。

■ 2 月 4 日（土）

羽田空港発、ヒースロー空港経由で夜にバーゼル空港到着。

バスでコルマールに移動。ホテル泊。

■ 2 月 5 日（日）

午前、オーケーニスブール城見学。レストランにて昼食。

午後、セレスタ市（ユマニスト図書館、教会）、コルマール市を見学（ウンターリンデン美術館、旧市街等）。レストランにて夕食。

コルマールのホテル泊。

■ 2 月 6 日（月）：合同ゼミ（ストラスブール大学）

バスでストラスブールに移動。

終日、ストラスブール大学にて合同ゼミ。

大学の食堂にて、両大学の学生、黒田先生、大学院責任者のサンドラ･シャール先生もご一緒に昼食。

ゼミ後、バスでリクヴィル村へ。見学後、レストランにて夕食。

コルマールのホテル泊。

■ 2 月 7 日（火）：合同ゼミ（ストラスブール大学）

バスでストラスブールに移動。

午前、引き続き合同ゼミ。

午後、ストラスブール旧市街見学（大聖堂等）、自由昼食･フィールドワーク後、レストランにて黒田先生もご一緒に夕食。

コルマールのホテル泊。

■2月8日（水）

午前、コルマールにてマティアス先生による講演。「ユニークな国「日本」――他文化の知覚におけるステレオタイプ、偏見の役割」と題し、18世紀後半以来のヨーロッパにおける日本のステレオタイプの変遷を踏まえ、ステレオタイプが固定化し偏見となることの危険性と、ステレオタイプを認識し解体する必要性についてお話しいただきました。

午後はレストランにて昼食後、コルマールにてフィールドワーク。

バスでハイデルベルクに移動。着後ホテル近くのレストランにて夕食。

ハイデルベルクのホテル泊。

■2月9日（木）：合同ゼミ（ハイデルベルク大学）

午前、ハイデルベルク大学にて合同ゼミ。その後、大学の食堂にて両大学の学生、クレーマ先生もご一緒に昼食。

午後、ハイデルベルク旧市街見学（ハイデルベルク城、哲学者の道）、レストランにて夕食。

ハイデルベルクのホテル泊。

■2月10日（金）

午前、ハイデルベルク旧市街にてフィールドワーク、自由昼食。

午後、バスでフランクフルト空港に移動。夜に成田空港に向けて出発。

■2月11日（土）

直行便で成田空港に到着。

3　合同ゼミの内容

本年度のストラスブール大学との共通テキストは中井正一の『美学入門』です。

まず2月6日の合同ゼミでは、三つの仏日混合グループが以下のような研究発表を行いました。

グループAは、『美学入門』の映画論におけるいくつかの概念を用いつつ、映画『めまい』や『永遠の0』を例にしながら、映画が観客に与える影響の構造を分析しました。とくに、中井のいう「物質的視覚」を通じた映画への信頼と、製作者側の「操作」の介在する余地に着目しました。

グループBは、芸術作品を通じて恐ろしさが美しさとして感じられるのはいかにして可能

かを論じました。さまざまな絵画を例としつつ、バークやカントの崇高概念などを援用しながら、恐ろしさと美の関係に迫りました。

グループＣは、映画『火垂るの墓』を例にしながら、中井のいう「ミメーシス」をアリストテレス『詩学』まで遡って捉え直し、それが人々の歴史意識にいかにして作用するかを分析しました。そして、映画の再現する歴史的事象へと観客の歴史意識が接続するとき、そこに中井のいう「聖なる一回性」が成立すると論じました。

そのうえで、全体での質疑応答を行いました。

翌２月７日には、前日の議論を踏まえてグループ・ディスカッションを行いました。活発な議論が行われましたが、各々のテーマについてさらに掘り下げて理解するには至りませんでした。その原因は、黒田先生が総括のさいに指摘されたように、それぞれのグループの取り上げる問題が大きすぎたことにあると考えられます。これは教員側の指導不足によるものであり、次回に向けての反省点です。

（なお、中井の『美学入門』にかんしては、同書の仏訳者であるミカエル・リュッケン先生（フランス国立東洋言語文化大学（INALCO））が 11 月下旬に講演のために滞日されたさい、ご多忙の合間を縫って法政大学にお越しくださり、レクチャーをしてくださいました。）

ハイデルベルク大学との共通テーマは慰安婦問題です。クレーマ先生の提案で、双方の学生は、慰安婦問題を扱った 2019 年公開の映画『主戦場』をあらかじめ視聴したうえでゼミに臨みました。

クレーマ先生によるイントロダクションの後、まずはハイデルベルク側の学生から『主戦場』についてのプレゼンテーションがあり、次いで法政側の学生４名が、用意したスライドを用いて、強制連行の有無についての論点整理や、戦時中の慰安所設置の是非、慰安婦問題の解決とは何を意味するのか、といった問題提起を行いました。

質疑応答の後、グループディスカッションを行いました。いわゆる広義の強制連行をあくまで「強制」連行と呼ぶことの是非や、ドイツにおける慰安婦問題の認識、ドイツと日本における戦争教育の充実度の違いなど、いくつかの重要な指摘や質問がなされ、充実した議論となりました。しかしその一方で、クレーマ先生が指摘されたように、映画『主戦場』についての議論が十分にできなかったことがやや残念でした。とくに、同映画を「プロパガンダ」的と呼ぶことについての法政側とハイデルベルク側の認識の違いが明らかになったので、その点についてはさらに掘り下げて議論することができたかもしれません。

4　参加学生の言葉から

帰国後、法政大学の参加学生全員に感想を書いてもらいました。その中から６本を、筆者の

了承を得たうえで、ここに転載します。

■学生 A

今年度の国際哲学特講（以下、国哲）はコロナ禍以来、初めての現地研修を伴ったものとなりました。コロナ禍以降、先生方や CEEJA の方々によって様々に工夫が重ねられ、続けられてきた国哲でしたが、今回、「なま」の交流ができたことをとても嬉しく思いました。以下、報告と感想です。

ストラスブール大の学生とは秋学期を通して合同授業の機会が設けられ、Zoom や SNS 上でのやり取りを重ねながら両大学の学生が参加する合同グループで現地研修で発表することを目的としたプレゼンテーションを作ってゆきました。学期の初めの頃は、中井正一『美学入門』は少し理解するのに難しいテクストだという声も聞かれましたが、回数を重ねるうちに法政大側もストラスブール大側も理解が進み、グループの中でそれぞれに意見を出すことが増えていったように感じました。今年度のような大人数のグループだと時差や各々の予定がある中での授業外でのグループワークの時間の確保、情報の共有には難しさがあるように感じました。そして、哲学を専門としない日本語学習者であるストラスブール大の学生と話すという経験は大きな学びとなりました。概念の話をする際にはより時間をかけて認識を共有する必要性も感じ、今回はそれが不足していたなと個人的に反省しました。

また、ストラスブール大との合同授業のタイミング以外にも、学期内では『美学入門』のフランス語訳を書かれた Michael Lucken 先生に法政大学に来ていただいて講義を受ける機会もあり、国内での通常授業もとても充実した特講だったと感じています。

ハイデルベルク大学では現地研修期間内の一日のみの合同ゼミという形で、現地の学生とも先生とも当日に「はじめまして」の状態で進行していきました。法政大学側の発表とハイデルベルク側の発表、それぞれの質疑応答が終わったあとはグループとしてそれまで出てきたテーマや疑問点について話し合いました。お互い初対面の状態から慰安婦問題というテーマについて話し合うという難しさがあるかと懸念していましたが、ハイデルベルク大の学生は自分達が学んできたこと・感じたことを素直に伝えてくれ、時間こそ足りませんでしたが良いディスカッションができたと感じました。ゼミ内で取り上げられた映画（賛成派と否定派へのインタビュー）について、法政大学生側は「公平に両方の声を取り上げているようで、片方はより過激な意見であったりして、実は片方に同情が向くような構成になっていた」と映画のつくりの傾きを感じていたのに対し、ハイデルベルク大学生側は「そのような傾きはわからなかった」「両方の声を聞けて面白いと思った」という感想を抱いており、この点についてはもう少し他のハイデルベルク大学生にも話を聞いてみたかったと思いました。

CEEJA 学術部門の Régine Mathias 副所長に講義していただいた、ステレオタイプと偏見の話は個人的にも大変興味のあるもので、面白く聞かせていただきました。自分たちで持つオートステレオタイプと外から持たれるヘテロステレオタイプ、ステレオタイプに悪意が混ざって偏見になっていくのだということだったかと記憶しています。個人的にはステレオタイプというのは積み重なって出来たひとつわかりやすい特徴のようなものであるという認識だったので、ステレオタイプを完全になくしフラットにしようというのは難しいのではないかと、ステレオタイプの問題が議論されるたびに思っていたのですが、偏見の前段階であるという情報は頭にキープしておこうと思いました。

今回の現地研修で得た学びを生かし、外国の方との間だけでなく、日本人同士の間でもより円滑にコミュニケーションをとれるように努めていきたいと思いました。またフランス語とドイツ語の学習をもっと頑張らなければなと思いました。

最後に、自分がストラスブール大とのグループワークに参加できないタイミングがありメンバーの皆に迷惑をかけたのですが、ストラスブール大の学生や他の法政生がフォローしてくれ、最終的に現地研修で皆と一緒に発表できたことは、心苦しくも私としては嬉しい経験になりました。この報告書をご覧になっているか分かりませんが、この場を借りましてもう一度関係する皆さんに、謝罪と感謝を申し上げます。ありがとうございました。

また、本来は一度しか受講できないはずの特講を、コロナ禍であったことを鑑みての措置ということで三年連続して受講させていただき、君嶋先生と安孫子先生、ありがとうございました。ストラスブール大の黒田先生にもハイデルベルク大のクレーマ先生にも CEEJA の徳江さんにも三年間大変お世話になりました。ありがとうございました。

■学生 B

秋学期を通して中井正一の『美学入門』を読み込み、2 月のはじめに 1 週間のフランスとドイツ研修が行われた。私は 2,3 年でもこの国際哲学特講を受講したがコロナウイルスの影響で海外研修が叶わず、卒業前ギリギリで参加することができた。ここでは授業よりも、海外研修に関して感想をまとめる。

1 週間はあっという間に終わった。楽しくて、失敗も良い思い出であった。以下に例を挙げる。フランスの 2 日目は雨が降ったが地面が反射して夜の街が美しい。Zoom でしか会えなかったフランスの友人と肩を並べて話している。日が経つにつれてすれ違う人に気軽に簡単な挨拶ができるようになる。酒は嫌いだが、味見させてもらう。大聖堂の鐘の音を体で感じる。ストラスブール大聖堂の螺旋階段の上り下りや哲学の道など体力を使う。このように小さなことが大きな刺激になった。2～4 年の受講者たちも年齢や学年を超えて仲良く過ごせた。

ただし、無事に1週間を過ごせたのは私たちに海外での暮らしに対応できる力があったからではない。ほとんどがストラスブール大学の学生、ハイデルベルクの学生、徳江さんが現地でサポートしてくれたおかげである。さらには現地の人々の中に英語で会話をしてくれる親切な人がいたからである。

スト大の同行者がいなければ、入りたい店を見つけても店員の方と話せないからと諦めていただろう。レジで出された金額の貨幣の出し方も分からず時間がかかる。ハイデルベルクの町を日本語でガイドしてくれなければ、有名な建物も大事な歴史も通りすぎていた。徳江さんが2時間交渉をしてくれなければ、ドイツのホテルに泊まれなかったかもしれない。私たちは用意してもらったバスで移動し、チケットを取ってもらい、料理の注文をしてもらった。受け身で何もかもが任せきりだった。今回私は海外の文化に触れることはできたが、海外の文化を知ることができたとはいえないと思っている。自分に語学力がなく、言語の壁に怖気づいたところに責任がある。自分の中に取り込んだと胸を張って言えるものがない。楽しくて濃い 1 週間であったが、まだまだ足りない。3 月に卒業し、4 月から社会人となる予定だが、海外に渡る機会を失ったと思わずに過ごしてまた挑戦できたらどちらの国にも行きたい。

最後に、来年度から国際哲学特講を受講するか迷っている方がいれば、ぜひ参加してほしい。このようにプログラムとして海外で過ごす 1 週間は一生忘れられない思い出になる。少なからず協調性が求められて緊張する日々を過ごすが、それだけ達成感もある。私は受講した3回とも、また参加したいと強く思ってきた。たとえ再びパンデミックや国際情勢が原因で海外研修が中止になったとしても、残念がらずにその時の最大を吸収して欲しい。大学生活の中でも、貴重な時間がある。

■学生 C

まずは、研修で大変お世話になりました。今回の国際哲学特講は、二年越しの待ちに待った研修で、実りの多いものだと感じています。今回の研修で学んだことは主に二つあります。

一つ目は、人との深いつながりは対面で作られるということです。去年はコロナの影響で、オンライン研修となり、大変悔しい思いをしました。それでも、相手の学生の言語能力の高さに驚き、刺激を受けました。しかし、今回の対面で実施した研修の刺激は桁違いです。それは、ドイツやフランスの学生の雰囲気や、考えに直接触れることができたからだと思います。オンラインの時は、フランス人やドイツ人学生が日本語で伝える際に困難に陥っていても、言葉でしか伝えることができませんでした。その結果、相手を助けることができず、「私の日本語がうまくなくてごめん」と言われることが多く、申し訳ない気持ちになっていました。しかし、今回の研修では、相手が困っている際に直接行動に移して助けることができました。さらに、

相手の雰囲気を知った上で話しかけることで、相手の根本的な性格や考え方を知り、より仲良くなることができたと思います。去年は、「フランスやドイツの学生と友達になった」という感覚でしたが、今回は「フランスとドイツの学生の○○と仲良くなった」という感覚があります。一緒に観光をして、ご飯を食べて、他愛のない話で時間を過ごすことによって、私のことを伝えるのに加え、相手のことを存分に知ることができました。去年も実りが多いと感じていましたが、今年は対面で外国人学生と話すことができ、より多くの実りを獲得することができました。

二つ目は、言語の壁があるからといって難しい議論を避けるべきではないということです。ドイツのグループディスカッションでは、慰安婦徴収の際の強制連行の「強制」に着目して議論を進めました。その際に、私の日本語がうまく伝わらず、私自身の日本語運用能力が乏しいことに気付きました。加えて、ドイツ語を大学で履修していたため、自分がドイツ語を話せたらより伝えることができたと、もどかしい気持ちになりました。この二つの反省が生まれたと同時に、言語の壁があるからといって、簡単な議論に終始するのは良くないと感じました。なぜなら、表面上のことだけしか語らない議論はステレオタイプを呼ぶと考えたからです。研修中にステレオタイプの講義を聞き、慰安婦の発表にでは日本が好きなドイツ人学生に対して、表面上だけではなく深層部分の日本を知ってほしいと思いました。そこで、徴収の際の強制から、慰安婦たちが慰安所で働く際の「強制」に議論を進めました。その結果、慰安婦について各メンバーの考えを聞くことができ、ドイツ人の学生からはホロコーストの話も聞くことができました。簡単な言葉だけでなく、絶対に伝えてみせるという勇気を出して、難しい議論に踏み込んだことで、国際交流を深めることができたと思います。

この二点の気づきを得た結果、私の見える世界を広げることができました。外国人学生の言語運用能力の高さ、歴史のある建築物はもちろんのことですが、海外の学生からは、【自分がやりたいことを貫く姿勢や、何歳になっても挑戦し続ける姿勢】を学びました。日本語以外の言語を話せないからと言って、私は海外で働くことを諦めていました。今後は、海外学生の上記の姿勢を見習い、大学卒業後に海外進出を視野に入れ、自分の将来を決めていきたいです。哲学の座学では決して獲得できない自分の人生の指針を研修を通して、獲得することができました！ありがとうございました。

■学生 D

私はこの研修を通して、「日本と他国の文化の違い」「物事の視点を増やすことの重要さ」「人のあたたかみ」の 3 点をとくに感じた。

まず当たり前ではあるが、日本とフランス・ドイツは国の歴史も違えば言語も違うし、食文

化も全く違う。今回の研修はそれを肌で感じることができた。それが自分に合っているかどうかは別として、自分とは違う文化のもとで生活している人がいるのだということをもっと深く理解していかなければならないと実感した。

続いての「物事を見つめる視点を増やすことの重要さ」は合同授業でとくに感じた。講義は日本語で進むため、私たちにとっては何の障害もない。そのなかで、母国語以外で哲学を学ぶという、非常にレベルの高い仕事を成し遂げている学生を見て、感銘を受けた。それに加えて、私たち日本人は母国語で学んでいる環境に甘え、油断してしまっていたのではないかとも思った。たとえば文献や授業に対して、自分が全く疑問を持たなかった語句の意味を質問されたり、自分の意見を想像以上に咀嚼していく学生をみて、衝撃を受けた。そしてこれまでの"自分の甘え"に気付かされた時間であった。自分が当たり前だと思い、知っている(理解している)と思っていたことすらも、視座・視点をずらすことで全く違く見えてくることも改めてわかった。そのため、今まで以上に物事に対して疑問を持って、多くの立場･視点から考えていがなければならないと強く思った。

そして最後に、今回の研修では人のあたたかさを 1 番強く感じた。先述したように、私にとって言語・文化の違う環境で生活していくことは非常に困難である。

しかし、現地の人々はすれ違うだけで微笑みかけてくれたり、挨拶を返してくれたり、コミュニケーションを取ろうとしてくれていた。街中では、どんなに些細なことであっても"ありがとう"と言ってもらえた記憶がある。この優しさに触れられたことが私にとって1番の思い出だろう。学生たちも、私たちがより楽しめるようにたくさんのことを教えてくれたり、たくさんの場所へ連れて行ってくれた。私がひとりでいるのを見かねて話しかけてきてくれたり、授業の話し合いが難航したときは自分の意見を伝えてくれた。いま振り返ると、今回の旅は人に助けられてばかりだったと思う。だからこそ、これからはしてもらったことを、今度は私が誰かにしてあげられるようになりたいと強く思った。

これをできるようになるためには、今回の研修で学んだ 3 点が重要になってくるだろう。「自分とは文化の違う生活をしている人がいるという事実をもっと深く知り、多くの視点から物事をみつめ、考える。そして誰かの役に立ちたいという気持ちをすぐ行動にうつす。」
このように勉強の面ではもちろんであるが、人として多くのことを得られた研修であった。大学に入学してからずっと、新型コロナウイルスの影響で大学生らしい思い出を作ってこられなかった自分にとって、今回この研修に参加できたことは非常に大切な思い出だ。大袈裟ではなく、一生忘れないだろう。

今回の研修を通して学んだことをこれからの生活へ繋げていけるようにしたい。そして、このような経験ができる、学べる環境にいられることへの感謝を忘れずに、これからも勉学に

励んでいきたい。

■学生 E

今回の研修では多くの刺激と学びを得ることができた。本レポートでは三つの事柄と研修を経て変化した自分の考えについて述べる。

まず現地の学生との交流を通して、いかに自分がなんとなくという感覚だけで日本語を扱っていたのかということに気付かされた。例えば黒田先生から主観と主体という言葉の意味の違いについて質問があったが、その質問がなければこれらの言葉の違いについて真剣に考えることはなかったと思う。また普段日本の哲学科生と話すときは、相手の理解力に甘えて、理路整然としないまま話し始めることが多く、実際に相手も大まかには理解してくれることが多いが、今回は自分の考えをまとめて、わかりやすく伝えることが必要とされた。そしてそれがどれほど大変であるかを実感する機会となり、とても成長することができたと思う。そして「大まかに理解してくれる」と前述したが、このような場合があるために日本人との会話の方が互いの理解が曖昧なまま進んでしまっている可能性があることに気づいた。会話の流れや雰囲気から言いたいことを察するということは、哲学の議論をする場においては誤解が生じかねないため、気をつけなければならないと思った。

次にフランス人は自国に誇りを持っていて外国人に冷たい、ドイツ人は真面目であまり笑顔を見せないというようなイメージを持って現地に向かったが、これらはステレオタイプであったことを痛感した。実際は両国とも学生たちが優しかったのはもちろん、どこのお店であっても丁寧に対応してくださった。インターネットの発達によって景色だけであればどの国の景色も自宅から見ることができるが、人々や街並みの持つ雰囲気を体験するという点で現地に足を運ぶということの意味は大きいと思った。これは言語に関しても言えると思う。今は優秀な翻訳機がスマートフォン一つで利用できる時代であるが、やはりその国の人々が使っている言語を理解して自分も使えるということは、その国の人々のコミュニティに属しやすくなるということであると考えた。そのことは現地の学生たちが一生懸命日本語を勉強していることが伝わってきて嬉しかったという経験や、現地の挨拶や簡単な言葉を話したら彼らが喜んでくれた経験から言えると思う。そして何より徳江さんが現地の方々と交流している様子を目の当たりにして、その人と親しくなるためにはその人と同じ言語で話すことが大切なことの一つとして挙げられるのではないかと考えた。

そして何よりかけがえのない友人をたくさん作ることができた。今回の研修の要素として一番大きいのはこの「友人が作れる」という点であったと言ってもいいかもしれないほど、私にとっては大きな財産となった。というのも、現地の学生は日本に興味があって大学で勉強

をしているため、互いの文化や建造物の違いなどに興味を持ちながら会話をすることができたのである。普段の旅行であれば様々な出会いや料理、建造物に触れることはできても、互いの国の違いについて、しかも日本についての知識があることを前提として話せる友人を作ることは難しいと思う。そして彼らの多くが日本に留学に来る予定があったため、連絡を取り合って必ず会おうという話をしている。このように一回きりではなく、長く続く友情を一週間という短い期間で築くことができるのは議論や観光などで濃い時間を過ごすことができる研修ならではであると思った。

最後に研修全体を振り返って自身の価値観の変化について述べる。私は高校生の時にアメリカに７ヶ月ほど留学していたことがある。その経験から、海外から見た日本の良さに気がつき、暮らしていくなら日本で日本語を使っていこうと思っていた。そして実際に大学では日本思想に興味を持って勉強してきた。しかし今回、海外で生活する黒田先生や徳江さん、そして海外にいながら日本について勉強している学生たちとの交流を通して、これから先の選択肢が増えたように思う。それは世界が一つの国という個別のものの集合だけで成り立つ単純なものではないと気づくことができたからだ。私は海外から見た日本の文化や言語に美しさを見出して、日本で暮らそうと思っていたが、徳江さんのように日本から来た人を海外でサポートしたり、海外の日本に興味がある学生をサポートしたりするような職業選択も素敵だと思った。まだ就職活動が始まっていない時期にこのような体験をすることができたのは自分にとって大きな財産となったため、今回の研修に尽力してくれた全ての人に感謝をして、今回の出会いをこれからも大切にしていきたい。

■学生Ｆ

今回の研修で多くのものを得ることができたと思う。まずストラスブール大学との合同ゼミでは、中井正一の『美学入門』を読みそこから日仏合同のチームでテーマを決めて発表準備を進めた。それぞれの予定や時差がある中で時間を見つけてlineやzoomを使い、話し合いを行なった。私のチームでは、日仏で意見が分かれることはあまりなかったが、言語の違いというのは少し難しいところだった。フランス側が非常に上手な日本語を使ってくれていたので話し合いにおいては特に問題は生じなかったが、語句の理解に若干のズレがあった。しかし、それも面白いことだと思う。日本語とフランス語と英語それぞれの訳し方があってそこからそれぞれ違った語句の理解が生まれる。それをどのようにして共通理解にしていくか、というのは難しいけれど興味深い問題である。また、理解の違いがなかったとしても、話し合う中でわかりやすく伝えることを意識した。日本語が上手だとしてもすべてを日本語で議論するというのはストラスブール大学の方達にとって難しいことだったと思う。だから少しでも理

解しやすく、話し合いやすくなるように、自分の意見を簡潔にわかりやすい日本語で伝えるようにしていた。それによって自分の中でも意見がまとまり理解を深めることができたので、一石二鳥だったと思う。時間をかけて準備を進めた分、内容の濃い発表を行うことができたし、交流もスムーズにできたので、このストラスブール大学との合同ゼミは充実していたように感じる。

次にハイデルベルク大学との合同ゼミについて述べたいと思う。ハイデルベルク大学とは合同発表ではなかったため、事前にコミュニケーションをとる機会もなく、当日現地で初顔合わせをし、数時間合同ゼミを行うという形だった。しかし、ディスカッションでは積極的に意見が出て盛り上がった。ひとりひとりがしっかり自分の意見を持ち伝えることができたので実のある話し合いがもてたのではないか、と思う。そのあとの昼食の時間や空き時間なども限られた時間を有効に使おうと日本側もドイツ側も積極的にコミュニケーションをとっていた。そのおかげで出会って数時間であることを忘れるほど仲良くなれた。

また、ストラスブール大学やハイデルベルク大学の学生にフランス語とドイツ語を教えてもらい、それをたくさん使って学生や店員さんに話しかけていた。正しい発音ではなかったかもしれないが、伝えようとする意思が相手にも伝わりコミュニケーションをとることができた。この研修では学生や店員さん、街ですれ違った人など多くの人と会話をし、何度も人の優しさに触れた。日本では知らない人との会話を避けがちだが、フランスでもドイツでも出会った人たちが気さくに話しかけてくれて、私もコミュニケーションをとろうと意識的に話すことができた。

フランス・ドイツの研修旅行を通して、一番身についたのは「伝えることの重要性」である。ゼミでの話し合いも自分の意見をわかりやすく伝えることが正しい理解にもつながるし、頭の中にある考えを伝えないと充実した話し合いができない。日常のコミュニケーションも同じで伝えることなしには何も始まらない。私は今まで自信がなかったため、積極的に行動することができずにいたが、多少の間違いがあったとしても自分で伝えようとする、その姿勢が大切なのだと感じた。そして少しではあるがこの研修のおかげで、自分から行動し伝えようと努力できるようになった。このストラスブール大学とハイデルベルク大学との合同ゼミ、研修旅行は本当に貴重な経験になった。この経験を生かして伝える姿勢を大切にしながら今後も成長していきたいと思う。

5　写真でたどるアルザス研修

研修の様子を収めた写真を紹介します。

■オーケーニスブール城

■二日目の昼食、ユマニスト図書館

■ストラスブール大学での合同ゼミ後

■ストラスブール大学の学食、四日目の夕食

■ストラスブール大聖堂前

■マティアス先生講演、五日目の昼食

■ハイデルベルク大学での合同ゼミ

■ハイデルベルク大での合同ゼミ後

■古い橋、ハイデルベルク城

■六日目の夕食、七日目の昼食

■参考：法政大学でのリュッケン先生のレクチャーの様子